

Title	中古語モダリティの階層構造 : 助動詞の意味組織をめざして
Author(s)	高山, 善行
Citation	語文. 1992, 58, p. 35-45
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68841
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中古語モダリティの階層構造

―助動詞の意味組織をめざして―

キーワード:述語構造、モダリティ、 助動詞、 係助詞の作用域

はじめに

当てて、述語構造と助動詞の意味との積極的な連絡を試みる。その なる点が少なくない。本稿では、「モダリティの助動(司)」に焦点を され、文法研究に寄与してきた。しかし、そのとらえ方は述語の意 が確かめられることになろう。 営みを通して、述語構造を階層的に把握することの有効性と限界と 味的階層と助動詞個々の意味とを関係づける視点においては問題と 従来、述語構造の研究は助動詞の相互承接現象の分析を軸に展開

本稿の目的

文構造との交渉である。本稿は後者について私見を明らかにするも について、かつて述べた。一つは文表現との交渉であり、一つは 助動詞の意味と文との交渉のありかたが二とおり想定されること

のである。

高

Ш

善

行

う。

<推量>とは何か、

<伝聞>とは何かというような概念規定が と一体のものであるなら、そこに還して母胎と一体化した形で理解 割を担うことは確かであるが、文構成においては文の構成メンバー 実を正確に表しているであろう。助動詞が文表現において重要な役 なされていないなど枚挙にいとまがない。かつての意味のとらえ ▲命令▶という対他的行為─これらを助動詞の意味に担わせてしま たとえば、▲婉曲>という表現効果、▲詠嘆>という文の情意、 は周知であるが、問題が山積されていることもまた周知であろう。 つける道はないであろう。 するのが正当だし、それ以外に述語構造と助動詞の意味との連絡を の一つに過ぎないことを忘れてはならない。助動詞が文の述語構造 かたは「意味記述」というよりは「あだ名をつけた」という方が事 古代語における助動詞の意味研究にかなりの量の蓄積があること

に(あるいはそれに依存した形で)階層構造がイメージされている

た。それらにほぼ共通していることは、助動詞の相互承接現象を軸

現在に至るまで、述語構造についていくつかの理解が示されてき

握」は古代語の文法研究においても広がりつつあるようである。の体系をとらえる試みであって注目される。このように「階層把いが挙げられる。両氏のモデルは現代語の考究をもとに創案されたものであるけれども、「階層把握」そのものは古代語においてもたものであるけれども、「階層把握」そのものは古代語においてもたものであるけれども、「階層把握」そのものは古代語においてもたがなりの有効性をもつことが期待される。たとえば、近藤泰弘の体系をとらえる試みであって注目される。このように「階層把握」と呼ぶこととであろう。こうした述語構造の把握を「階層把握」と呼ぶこととであろう。こうした述語構造の把握を「階層把握」と呼ぶこと

以下、「階層把握」を古代語のモダリティの研究に援用する際、問ては「階層把握」ではとらえきれない問題が多いように思われる。しかし、問題がないわけではない。特にモダリティの議論におい

題となる点を挙げておく。

が正確に位置づけられない。 が正確に位置づけられない。 が正確に位置づけられないのかもしれないが、「階層把握」が述語構 とらえる以上仕方がないのかもしれないが、「階層把握」が述語構 とらえる以上仕方がないのかもしれないが、「階層把握」が述語構 の本質をついているとすれば、あたかも鏡が立体の姿を映すよう とらえる以上仕方がないのかもしれないが、「階層把握」が述語構 のを質をついているとすれば、あたかも鏡が立体の姿を映すよう とらえる以上仕方がないのかもしれないが、「階層把握」が述語構

は層と層との連続性を明らかにするものでなければならない。とらえていくか。より有効性の高い階層の設定をめざすなら、それ助動詞層と終助詞層、プロポジションとモダリティの連続性をどうに層と層との連続性が捨象されてしまうと問題である。たとえば、ア 階層間の連続性の把握について。階層を設定することと引換え

稿はそうした要請にもとづいた、中古語のモダリティを対象とした乗ってみて有効性と限界とを見極めておく姿勢が要請されよう。本ても、本格的な方法的批判を意図するならば、いったんこの把握に事実は動かしがたい。仮に「階層把握」を認めない立場をとるにしただ、問題があるにせよ、「階層把握」が多数の支持を得ている

二現象の記述

「階層把握」の批判的実践である。

二・一 分析の方法

具体的には以下の諸形式を分析の対象とする。 リティとが分離しにくい古代語の実情も考慮に入れてのことである。 リティとが分離しにくい古代語の実情も考慮に入れてのことである。 これは典型的な Plototipical モダリティ形式と周辺的な形式と る。これは典型的な Plototipical モダリティ形式と周辺的な形式と の連続性をとらえる意図であり、同時にテンス、アスペクトとモダ の連続性をとらえる意図であり、同時にテンス、アスペクトとモダ の連続性をとらえる意図であり、同時にテンス、アスペクトとモダ の連続性をとらえる意図であり、同時にテンス、アスペクトとモダ の連続性をとらえる意図であり、同時にテンス、アスペクトとモダ の連続性をとらえる意図であり、同時にテンス、アスペクトとモダ の連続性をとらえる意図であり、同時にテンス、アスペクトとモダ の連続性をとらえる意図であり、同時にテンス、アスペクトとモダ の連続性をとらえる意図であり、同時にテンス、アスペクトとモダ の連続性をといった。

| ケム、マシ、ジ | ツ、ヌ、ケリ、ベシ、マジ、終止ナリ、メリ、ム、ラム、

(ラシ、ベラナリなど)は今回はとりあげない。とにする。この種の形式は他にも存するが文体的偏りの顕著なもの本稿ではこれらの形式を一括して「モダリティの助動詞」と呼ぶこ

系資料は用いない。なお、「階層把握」の検討が中心となるため、 用いる。文体的要因の混入を避けるため、今回は訓点資料等の漢文 また、用例採集の資料は『源氏物語』を中心に和文系文学作品を

現象の報告、挙例は必要最小限にとどめることにする。 続いて分析の具体的な方法について述べる。本稿では各形式にい

である。
(8)。
あって、「表だけ切る」「裏だけ切る」ということは本来不可能なのあって、「表だけ切る」「裏だけ切る」ということは本来不可能なのあって、「表だけ切る」「裏に裏の異保で じめて見えてくる。共通性と差異とは切断する紙の表と裏の関係で さえることが前提となろう。差異の価値は共通性と合わせてみては 置かれていたが、差異が本質的なものか否かを知るには共通性を押 と差異とを相対化できることである。従来、形式間の差異に重点が る大きなメリットは同一の尺度で測ることにより、各形式の共通性 くつかのテストをおこなって構文的特徴を取り出し、その結果から 階層を設定してみるという手順を踏むことにする。テスト形式をと

||一・|| | 構文的特徴の記述

からアプローチを試みる。すなわち、 以後、具体的に構文的特徴の記述をおこなうのだが、三つの観点

- 従属句中の生起 ……… 助動詞と句との関係
- 係助詞との関係 ……… 助動詞と文との関係
- 頼度の高さも1>2>3(高>低)の順であることが予想される。 たと言えるだろう。研究の蓄積から考えると、テストそのものの信 である。研究のながれはおおよそ1>2>3の順で進められてき

二・二・一 助動詞の下接

ぞかせた例と見てよい。 氏物語』には僧の会話文の一例だけであって、漢文的要素が顔をの ごく少数ながら例が報告されている。また、ベカラズの例は『源否定辞が下接しうるのはツ、ヌ、ベシである。ツ、ヌについては 否定形式下接テスト

[ベカラズ]

(1)「…人の命久しかるまじきものなれど、残りの命、一二日をも

テンス形式キが下接しうるのは、ツ、ヌ、ベシ、マジ、メリ、終 惜しまずはあるべからず。…」 ② テンス形式下接テスト

リキ、ナリキの形で承接する。止ナリである。それぞれ、テキ、ニキ、ベカリキ、マジカリキ、メ

[ナリキ]

ナリキ。」の例は今のところ見つかっていない。(ヨ) ナリキは係助詞の結びと連体句中の例だけが見られ、文末終止「― (2)いと、昔物語のあやしきものの事のたとひにか、さやうなるこ とも言ふなりし、と思ひ出づ。

③ モダリティ形式下接テスト

量形式 Evidentials やそれにつながるケリが下接し、ム、ケム、マやや詳しく言えば、ベシ、マジともにメリ、終止ナリという証拠推 シといったム系の形式はベシの方だけに下接する。 モダリティ形式が下接しうるのはツ、ヌ、ベシ、マジである。 (ユイ)

[ッベシ]

仮定句と呼ぶことにしよう。仮定句に生起しうるのは、ツ、ヌ、(エク) (9)便なきことも出で来なば、いと人笑へなるべし。 (源氏、東屋) (8)「…大人しく見なしてば、ほかへもさらに行くまじ。…」 ベシ、マジ、マシである。 (7)「…いかならんをりにか、その御心ばへほころぶべからむと、 [ベカラム] (6)参り来て見出し立てんとするを、寄せ給まじかなれば、いかが [マジカナリ] (5)「…女宮たちのあまた残りとどまる行く先を思ひやるなん、さ [ベカリケリ] (4)かくかたはにしつつありわたるに、身もいたづらになりぬべけ [ヌベシ] (3)…船子どもは、腹鼓をうちて、海をさへ驚かして、波立てつべ すべからん。 従属句の中で「もし~ならば」という仮定的な意味を表すものを 世人もおもむけ疑ひけるを、…」 らぬ別れにも絆なりぬべかりける。」 れば、つひにほろびぬべしとて、… ④ 仮定句中生起テスト 二・二・二 従属句中の生起(16) (源氏、若菜上) (源氏、若菜上) (源氏、紅葉賀) (蜻蛉日記) (伊勢物語) (土佐日記) [一メレバ] たム系のものは因由句中には生起しえない。 (16)えとどむまじければ、たださし仰ぎて泣きをり。」(竹取物語) [―マジケレバ] (15)「…人もゆゆしく見思ふべければ、今は世にあるものとも人に [―ベケレバ] (4)宮は、そのころまかでたまひぬれば、例の、隙もやとうかがひ [一ヌレバ] (13)風いたく吹きぬべしと人々の申しつれば、… [一ツレバ] ベシ、マジ、メリ、終止ナリである。ム、ラム、ケム、マシといっ を因由句と呼ぶことにしよう。因由句中に生起しうるのは、ツ、ヌ、 (12)「まして、竜を捕らへたらましかば、また事もなく我は害せら [―マシカバ] (1) 「さだにあるまじくは、道のほども御送り迎へも、おりたちて [―マジクハ] (10)「…この、人の御車入るべくは、引き入れて御門鎖してよ。」 [一ベクハ] 知られはべらじ」とて、 歩きたまふを事にて、大殿には騒がれたまふ。(源氏、紅葉賀) 仕うまつらんに、…」 主句の原因・理由を表す(「~するから」「~するので」の意)句 れなまし。」 ⑤ 因由句中生起テスト (源氏、宿木)

(17)「…若君は、いかに思ほし知るにか、参りたまはむことをのみ なん思し急ぐめれば、…」 (源氏、桐壺) て文体的要因が混入せざるをえない。 よって今回は連体ナリ上接 の準体句に限定しておく。連体ナリ上接の準体句中に生起できるの

(18)「…なにがし僧都みなその心くはしく聞きおきたなれば、また [ーナレバ] はツ、ヌ、ベシ、マジの四つである。

加へてすべき事どもも、かの僧都の言はむに従ひてなむものすべ

⑥ 逆接句中生起テスト

き」などのたまふ。

(源氏、幻)

ドモのなす句を想定している。「モダリティの助動詞」はほとんど逆接関係を表す句を逆接句と呼ぶことにする。典型的には、ド、 逆接句中に生起できる。前二種の従属句に生起しえなかったム、ラ

ム、ケムも逆接句には生起しうるのである。

(19)「のたまふやうに、ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼ えはあらめど、心にたへぬもの嘆かしさのみうち添ふや。…」

(源氏、若菜下)

[―ラメド]

(21)「…ひとつ家の内は照らしけめど、ももしきのかしこき御光に [ーケメド] (20)「…なまいどましき下の心はおのづから立ちまじりもすらめど、 は並ばずなりにけり。」

(源氏、御法)

逆接句中に生起しえないのはジとマシである。 ⑦ 準体句中生起テスト

で文末終止した準体句もあるが、多くは和歌に見られるものであっ ここで扱う準体句は連体ナリに上接した準体句である。ノの結び

(22)「しかじか。権大納言殿の御八講に参りてはべりつるなり。」

ヌ (23)昔、「忘れぬるなめり」と問言しける女のもとに、…

[ベシ] (2)「ただ今は、人聞きのいとつきなかるべきなり。」 (源氏、 、須磨)

(25)…何にさる事をさださだとけざやかに見聞きけむと悔しきは、 わが御心ながらなほえ思しなほすまじきなめりかし。(源氏、葵)

係助詞ナムの結びになりうるか否かについて調べてみると、ツ、 ナム共起テスト

二・二・三 係助詞との関係

法としてはナムの結びにはならない。(②)すでに旧稿で指摘したとおり、ナムの結びとなるムは Epistemic 用 ラム、ケム、マシ、ジは結びになりえないことがわかる。ただし、 ヌ、ベシ、マジ、メリ、終止ナリ、ケリ、ムは結びになりうるが、

(源氏、絵合)

疑問表現と関わりの深い係助詞ヤやカの結びには「モダリティの ⑨ ヤ、カ共起テスト

助動詞」すべてが結びになりうる。ただし、Evidential 系のメリ、

終止ナリ、ケリと否定系のマジ、ジは普通、反語表現となるようで

[―ヤーメル]

、26) 「…院の御ありさまに並ぶべきおぼえ具したるやはおはすめ__ る。 (源氏、若菜上)

―ヤ―ナル]

(27)「かくうきことあるためしは下衆などの中にだに多くやはあな! る。 (源氏、浮舟)

.―カ―ケル]

(2)「うたた寝はいさめきこゆるものを、などか、いとものはかな きさまにては大殿籠りける。…」 (源氏、常夏)

_ 一カーマジ]

(29)「…などかよそにても、なつかしき答へばかりはしたまふまじ (源氏、空蟬)

[ーカージ]

(30)はづかしく心づきなきことは、いかでか御覧ぜられじと思ふに、 かかるそら言のいでくる、くるしけれど、…(枕草子、二三八段)

⑩ ゾ、コソ共起テスト

びとなる。 である。ジはゾ、コソの結びにならず、そのほとんどがハ、モの結 係助詞ゾあるいはコソの結びとなるのは、ジ以外のすべての形式

テストの結果

ここで、後々のために前項テスト①~⑩を整理しておく。

I であるから、用いられた形式が〈判断性〉を表すとしたらテスト① で out となる。逆に ok の場合はプロポジション内的意味(コトガ テスト①について。〈判断〉そのものの否定は原理的に不可能

ラ的意味)がとりだされる。

Ⅱ テスト③。典型的な判断は文に一度のはずであるから、モダリ ティ形式が重複するとき、前項は〈様態性〉にずれこむであろう。

括って〈様態性〉の判定基準とする。 許容されうるのは〈様態性〉のみである。そこで、テスト③④⑦を また、基本的にモダリティ成分を許容しない仮定句中、準体句中に

正モダリティと疑似モダリティとの境界をなすことから、テスト② ガラに用いられるナムの結びとなることが〈狭義推定〉と〈狭義推 Ⅲ テスト⑤。因由句に生起して確定条件法をなし、確定的なコト 量〉の境界となることはかつて述べた。テンスが現代語において真

動詞層の述語構造的意味を〈様相性〉と呼ぶことにすれば、テスト もここに含め、テスト②⑤⑧を〈確定性〉判定基準として括る。 スト⑨⑩でとりあげた係助詞は作用が助動詞層全体を覆う。今、助 テスト⑥。逆接句は終助詞以外はすべて許容できる。また、テ

⑥⑨⑩を〈様相性〉判定基準として括ることができる。

結局、テスト①~⑩は次のように整理されることになる。

1 ① IV 690 11 20 8 II 34 7 : : : 〈+様態性〉or 〈+判断性〉 〈+確定性〉or +様相性) o r o r (一判断性) (一様相性) 〈一様態性〉 (+想定性)

以上の整理にもとづいた前節テストの結果を表に示しておこう。

20	, ,	* > 1111	//-									
形式	テスト	1	3	4	7	2	(5)	8	6	9	10	【テスト一覧】
"	7	Δ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	①否定形式下接
ز ا	Z	Δ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	②テンス形式下接
ベ	シ	Δ	0	0	0	0	0	Ο	0	0	0	③モダリティ形式下接
マ	ジ	×	0	0	0	0	0	0	0	0	0	④仮定句中生起
ケ	ij	×	×	×	0	×	0	0	0	0	0	⑤因由句中生起
×	IJ	×	×	×	×	0	0	0	0	\triangle	0	⑥逆接句中生起
終止	ナリ	×	×	×	×	0	\circ	0	0	Δ	0	⑦準体句中生起
1	4	×	×	X	X	×	X	Δ	0	0	0	⑧ナム共起
ラ	ム	×	×	×	×	×	X	×	0	0	0	・ ⑨ヤ、カ共起
ケ	ム	×	×	×	×	×	×	×	0	\circ	0	⑩ゾ、コソ共起
マ	シ	×	×	0	X	×	×	×	×	\circ	Ο	
3	j.	×	×	X	X	×	×	×	×	Δ	×	
終月	力詞	×	×	×	×	×	X	×	×	×	×	

- ※ 表を見やすくするため、縦に挙げる形式群はテストで○の多い形式から少ない形式へという順で配列してある。(△は用例稀小、×は用例ナシ)
- ※ 助動詞層と終助詞層との連続性を見る意図から、終助詞ゾ、カの結果も合わせて掲げる。

続面での近さと合わせて了解されるべきであろう。 ダリティの議論に参加させる上で重要な事実であって、

形態面、

スト⑨において三者いずれもが、すべて反語になることはケリをモ去の助動詞」と呼ばれるケリとの連続性を示す事実と言えよう。テれてよい。「推定の助動詞」として括られるメリ、終止ナリと「過ところである。ここで、ケリが両者と似た結果を示すことは注目される。メリと終止ナリの共通性については、すでに旧稿で検証した

ま三に、ム、ラム、ケム、マシといったム系助動詞がほぼ同じ結 を示している。細かく見れば、ム、ラム、ケムが全く一致するの 果を示している。細かく見れば、ム、ラム、ケムが全く一致するの 果を示している。細かく見れば、ム、ラム、ケムが全く一致するの 果を示している。細かく見れば、ム、ラム、ケムが全く一致するの 果を示している。細かく見れば、ム、ラム、ケムが全く一致するの 果を示している。細かく見れば、ム、ラム、ケムが全く一致するの 果を示している。細かく見れば、ム、ラム、ケムが全く一致するの まごに、ム、ラム、ケム、マシといったム系助動詞がほぼ同じ結

とは近い位置にあると言える。今後、意味的性格の連続性が明らか離された扱いである。しかし、一般的理解に反して、ツ、ヌとベシ括られ、ベシ、マジは「推量の助動詞」として括られており、切りの結果とほぼ一致する。一般に、ツ、ヌは「完了の助動詞」としてあったツ、ヌ、ベシは全く同じ結果を示している。マジもそれらさて、表の内容からうかがわれる特徴を挙げていくことにしよう。

にされるべきである。

第二にケリ、メリ、終止ナリがほぼ同じ結果を示すことが注目さ

Ξ

文的特徴の束を基準として階層を設定するのである。(図1参照) と層とが「一対多対応」するモデル(bタイプ)を考えてみる。構 問題が克服できない。ここで発想を百八十度転換して、形式(群) 「一対一対応」していた。(aタイプ) しかし、それでは第一節8の は相互承接をそのまま写像した設定方法であって、形式群と層とが さて、 いよいよ先の表をもとに階層図を描いてみる。従来の階層

[aタイプ] 形式 層 [bタイプ] 層

階層設定の原理

図 1

形式

図 2 モダリティの階層

述語構造	意味的階層	
P (プロポジション)	ツ1、ヌ1、 ケリ1	T (3)
M 1 (様態性)	ツ2、ヌ2、 ベシ1、 マジ1	I (①)
M 2(確定性)	メリ、終止ナリ、ベシ₂、ケリ₂、マジ₂	
M 3 (想定性)	ム、ケム、ラム、マシ、ジュ	·····II (258)
F(終助詞層)	終助詞ジュ	·····IV (6(9)10)

わす。図のように Fは終助詞層を表 Mはモダリティ層 プロポジション、 を設定する。Pは 群を縦軸にして層

× Pのツ₁、ヌ₁はアスペクト的意味、ケリ₁は テンス的意味である。

定した。すなわち、

〈様態性〉〈確定

ルが存在すると仮 Mには三つのレベ

従来の個別研究の成果を取り入れて補ったところもあ トの結果に忠実に

り表に示したテス

いく。できるかぎ ごとに組み込んで かれた形式群を層 て、表の縦軸に置 三層である。そし 性〉〈想定性〉

相関していよう。このように、本稿の階層設定は相互承接という固 ある)一つの層に収まるか、複数の層にわたるかは形式の多義性に 層の中で一形式が複数の層に位置するはずである。(一つの場合も

原理的には述語的意味の階層はアプリオリに存在しており、その階

定した統語連鎖から階層を設定するのとは逆の設定方法になるわけ

る。

以下、この階層図においてポイントとなる点を挙げておこう。

配置したが、

若干説明を加えて 階層図について

おく。まず、先の

表の横軸のテスト

とになる。このような意味の決まりかたの詳細についてはそれぞれそして、どちらが出力されるかは構文的環境によって決定されるこて言われる〈様相的推定〉と〈論理的推定〉はここに表れてくる。に言われる両形式の多義性と対応している。たとえば、ベシについ第一に、ベシ、マジが多層的であることである。これは、一般的第一に、ベシ、マジが多層的であることである。これは、一般的

ることになるのではなかろうか。告がかつてなされた。本稿のテスト結果はその理解に根拠を与えてあっても、マジは客体的でありジはより主体的であるという報第二に、マジとジの分担関係が見てとれる。同じく否定推量の形の形式の個別論で扱われることになる。

第三に、文構造における係助詞の力の及ぶ範囲である。これを以

作用が始めて客観的にとらえられたわけである。 階層モデルによって、従来直観的に把握されてきた係助詞の係りの作用域はナムンゾ、コソ、ヤ、カンハ、モの順で広くなる。本稿の作用域はナムンゾ、コソ、ヤ、カンハ、モの順で広くなる。本稿のでしか作用が及ばない。一方、ヤ、カ、コソはM3まで作用が及ぶ。下、係助詞の作用域 Scope と呼ぶことにしよう。ナムはM2の層ま下、係助詞の作用域 Scope と呼ぶことにしよう。ナムはM2の層ま

本稿の方法は現代語の述語構造を見直す上でも有効であろうことをいるように思われる。今回は古代語が対象なので詳述は避けるが、形式と層との「一対多対応」モデルの方がよく述語構造をとらえて試作ゆえ技術的にはまだまだ改良の余地があろうが、原理的には

り「階層把握」は何でも切れる万能のハサミではないので)た。一方、その把握ではとらえきれない側面も当然ある。(もとよ以上、「階層把握」の有効に効いてくる側面について述べ来たっ

付け加えておきたい。

で扱える範囲を越える問題であろう。「階層把握」という方法は睡の複合形式であるナメリ、ナルベシなどの扱いなども「階層把握」という次元において説明可能と思われる。さらに性―非現実性」という次元において説明可能と思われる。さらに性―非現実性」という次元において説明可能と思われる。さらに性―非現実性」という次元において説明可能と思われる。さらに性―非現実性」という次元において説明可能と思われる。さらに性―非現実性」という次元において説明可能と思われる。また、終は「否定」そのものの原理的問題があり、検討を要する。また、終は「否定」そのものの原理的問題があり、検討を要する。また、終し「おどい位置にあると一応言えはするが、テスト④⑥の結果に助動詞と近い位置にあると一応言えはするが、テスト④⑥の結果に助動詞と近い位置にある。マシは述語構造上、ム系のたとえば、前述のマシの処理である。マシは述語構造上、ム系のたとえば、前述のマシの処理である。マシは述語構造上、ム系の

にもなるということに注意しておくべきであろう。 眠薬と同様、ほどほどに適用すれば薬だが、強く適用しすぎると毒

おわりに

助動詞の意味組織が編まれるまでの道のりは限りなく遠い。助動詞を文に還していくところから始められなければならなかった。助動詞を文に還していくところから始められなければならなかった。かな一歩となることを望みたい。それは文から離れてしまっていたかな一歩となることを望みたい。それは文から離れてしまっていた動詞」の意味体系が多次元的な構造を持つとしても、まず文との連動詞」の意味体系が多次元的な構造を持つとしても、まず文との連動詞」の意味体系が編まれるまでの道のりは限りなく遠い。助動詞の意味組織が編まれるまでの道のりは限りなく遠い。

稿了)。

(一九九二年一月十二日

- (1)本稿では広義推量の助動詞にケリを加えた助動詞群を一括して「モダリティ
- の助動詞」と呼ぶ。
- (2) 高山善行 (一九八八)参照
- (3) 髙山善行 (一九九一b) 参照
- (4) 北原保雄 (一九八一)、仁田義雄 (一九八九) 参照
- (5)北原保雄(一九八一)、仁田義雄(一九八四)ではすでにその可能性が試さ れている。
- (6)近藤論文からは教えられるところが多かった。ただ、助動詞の理解に関して、 ただきたい。 本稿とは立場が異なるようである。そのあたり、是非、本稿と読み比べてい
- (7)ツ、ヌやケリのモーダルな側面に関する議論はすでにある。しかしながら、 その大半は意味的観点からのものであって具体性、客観性を欠くものが多い。
- (8)個別形式の中心的意味をつないでいく方法では、それぞれをつなぐレベルの 動詞を文から乖離させてしまうことになる。 客観二元論」のもとに助動詞を振り分けたり、序列化したりする方法では助 統一が難しく、助動詞の意味体系をとらえられない。また、単純な「主観―
- (9)1については北原保雄(一九八九)など、2は高山善行(一九八七)、小田 勝(一九九〇)近藤泰弘(一九九一)など、3は高山善行(一九八八)など
- (10)ツ、ヌの否定については近藤明(一九八九)に詳しい記述がある。
- (11) 「古典を読むための助動詞と助詞の手帖」(学燈社 昭和五九・六) 「べから ず」の項(森野宗明氏執筆)参照。
- (13)伝聞表現とテンスとの関係については別稿を用意している。 (12)連体ナリにはキ、ツが下接しない。高山善行(一九九一a)参照
- (4)ツ、ヌについては「確述用法」「強調用法」として知られており、モーダル な意味で理解されることが多い。
- (15) Chafe and Nichols,ed (一九八六) 参照
- (16) 高山善行 (一九八七)参照。
- (17) 複雑な問題が絡むため、トモによる仮定逆接句はとりあげない。
- (18)逆接的な意味関係を広く求めるならば、ヲ、ニなど格助詞出自の接続助詞も 射程に入れておく必要があろう。本稿ではまだ、それらをもふくめて検討す る用意が整っていない。

- (19)近藤泰弘(一九八六)、高山善行(一九九〇)参照。
- (20) 高山善行 (一九八八)参照。
- (21) アリを含む形態であること、及び接続が連用、終止の二様にわたること。
- (22)川端善明(一九七八)に次の記述があり、示唆的である。「或る一つの助動 され得るならば、それは、述語的意味の層自体の部分的な交渉である。」 動詞がその意味において、二つ(以上)の層に収まるならば―収まると解釈 詞が、その属する層を、常に唯一にもっているものとは限らない。一つの助
- (23) 中西宇一 (一九六九) 参照。
- (24)中田祝夫(一九六三)参照。北原保雄(一九八一)にも言及がある。
- (25) 係助詞の文末述語への作用については、係りが「浅い」「深い」などという ての階層がうまく設定されていなかったことによるのではないか。 言えないだろうか。従来の指摘が直観の域から出ないのは作用の受け皿とし 表現が用いられてきた。これは述語の階層構造を承認していたことの証拠と
- (26)ム、ベシ等も当然この問題に絡む。マシとム、ベシ等との意味的な関係につ 式との関係については別稿を用意している。 いては山口堯二(一九六八)参照。ただし、〔現実―非現実〕とモダリティ形
- (27)ナナリ、ナメリ、ナルベシ、ナリケリ等はもはや複合辞化し独立したものと 体研究においてはこの見地から数々の成果が挙げられている)本稿ではあえ てとりあげなかったが、今後「複合モダリティ形式論」として取り組みたい。 して、終止ナリ、メリ、ベシ、ケリ等とは別に扱うことも可能であろう。(文

◇用例調査に用いた資料

「日本古典文学集成」新潮社)『源氏物語』(『日本古典文学全集』小学館『日本古 日記」『紫式部日記』『更級日記』『古今和歌集』『拾遺和歌集』『金葉和歌集』『詞 集』(以上「新編国歌大観」角川書店 典文学集成』新潮社)「後撰和歌集」「後拾遺和歌集」「千載和歌集」「新古今和歌 花和歌集』(以上『新日本古典文学大系』岩波書店)『蜻蛉日記』『大鏡』(以上 「竹取物語」「伊勢物語」「枕草子」(以上「日本古典文学大系」岩波書店)「土佐

阪倉篤義 (一九六六) 『語構成の研究』 (角川書店) 中田祝夫(一九六三)「解釈文法雑筆(その二)―『べし』と『まじ』およびその 『裏』と「表」(その一) ―」(「国文学 言語と文芸」昭和三八・七)

要一字式三・三) (具質)を (具質)を (イン)・ション・ション・ション・ション・ション・ション・ション・ション・ション・ション	(「国語国文」昭和四三・五)のちに ――(「九九〇)「ラムの特別で設計日本語が完了 助動詞」(有精堂)に ――(「九九一a)「連体ナリン (日本語研究7 助動詞」(有精堂)に ――(一九九一a)「連体ナリン (大修館書店) (大成館書店) (大成	(「日本任の主) に (「日本任の主) に (「日本任の主) に (「日本語の主) に (「日本任) に (「日) に に (「し) に に (「し) に に に に に に に に に に に に に に に に に に に
-------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(「日本語学」平成二・五) (「日本語学」平成二・五) 九九一a)「連体ナリと終止ナリー研究のながれとその意義―」(「国 ・EVIDENCIALITY" The Linguistic Coding of temology (ABLEX) Nichols.ed (1986) "EVIDENCIALITY" The Linguistic Coding of temology (ABLEX)

—本学助手—